ザ・エンターテインメント 1984

日本文芸家協会編

ザ・エンターテインメント 1984

日本文芸家協会編

角川書店

ザ・エンターテインメント　1984

1984年6月10日　初版発行

編纂者　日本文芸家協会

発行者　角　川　春　樹

発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話 営業 03—238—8521
編集 03—238—8451

〒102　振替東京3-195208

印刷所　新興印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

Printed in Japan　0093-872377-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ザ・エンターテインメント　1984

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

書き手自身のもの

眉村　卓

二十年か三十年前には、小説というものにそれなりのイメージがあり、分類も比較的容易だったようである。というより、そうした分類がそのまま通用し得たと解釈すべきなのかも知れない。世の人々もそのつもりで、自分の価値観や生きかたに従って、小説というものに対してきた。

いや、今でも同じ感覚を持ちつづけている人は、すくなくないようである。

先日、あるパーティに出席したところ、近づいて来た私よりだいぶ年上の紳士が、

「おたく、何屋さんですか」

と、たずね、

「はあ、小説などを書いております」

と、こちらが答えると、とたんに興味を失した表情で、ああそうですかと呟き、離れて行った。要するに私が、場違いなパーティに出ただけの話なのであろうが、小説に対する固定観念を抱く人々が、まだまだ多いのを思い知らされた感じであった。

こうした、以前にはさほど不思議ではなかった事柄を書いたのは、最近の小説がきわめて多様化しており、描かれる世界も観点も千差万別のさまを呈していることを、痛感していたからである。それは読

者の幅がとみにひろがり、昔なら決して書かれることがなかったようなものまでが求められ、書き手もまた従来のもの書きコースからだけでなく、至るところから登場し、あたらしいタイプの作品を提供するようになったためであろう。小説の読まれかたも、だからさまざまになってきた。即物的な人は、かつてのそれとは全く違う目的で小説を読み、利用しようとしているようである。そういう時代になっているのに依然として旧来の意識で小説というものを見ている人がいたというのは、どこか奇妙な気分であった。

そして一方では、これまでの小説概念では律し切れないものを追って、読み、書く人々が増えてきたのも事実である。かれらの目からは既成の小説やその概念が、ひどく古ぼけたものに映っているのかもわからない。

こうした小説世界の拡大と変容の中にあって、書き手がすべての読者を満足させようというのは、不可能事である。へたに、誰にでも面白がられるものを書こうとすれば、自分を喪失し空中分解に至るのではないか、という気がする。そんなことをいっても、世にはベストセラーが次々と生れているではないか、しかもそれらの作品には、多数の人々をひきつける要素があるではないか——と、難じるむきもあるだろうが……理由づけはあとからだから出来るのであって、すくなくとも日本においてのベストセラーは、そうなるのが目的で書かれたというより、結果としてそうなった場合がほとんどなのではあるまいか。

むしろ、こういう時代だからこそ、自己の内部衝動と自分の流儀に従って書きつづけるべきなのであろう。ここにおさめられた作品が光を放っているのは、そのためだと信じる。

目

次

まえがき　眉村卓　三
書き手自身のもの
冬の幽霊　藤本義一　九
夜のグリコ　村松友視　二七
一枝の迎春花　伊藤桂一　四五
女体　駒田信二　五九
食道楽殺人事件　野坂昭如　七三
自殺省　山田正紀　八五
奇談パーティ　阿刀田高　一〇一
カムバック　高橋三千綱　一一九
大仕事　泡坂妻夫　一三七
スッポンポン　唐十郎　一四三
誇り高い女　佐野洋　一五七
国道　豊田有恒　一六九
風婚　色川武大　一八一
プライベート・ライブ　山口洋子　二〇三

くちづけ　落合恵子　三五
肉の鏡　宮本輝　二六三
イヤリング　森瑤子　二七九
風の噂　渡辺淳一　二九九
小さなバーでの会話　星新一　三三
あとがき　尾崎秀樹　三一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

冬の幽霊（ゆーれん）

藤本義一

作者のことば　藤本義一

三十代半ばから、上方の芸人ものを書いてきた。

なぜ、芸人に魅かれるかというと、人生のぎりぎり一杯のところで、自己の存在を手探っているからである。板一枚下は地獄というのは船頭ではなく芸人であると思う。舞台のことを俗にイタというのをみてもわかる。

その芸人を支えているものは、一体なんだろう。

執念である。人生の軸に、どの芸人も執念を燃やしている。昨今の芸能人と呼ばれる人たちの中には、これが稀薄な人もいるが。

その執念が何辺にあるかは、一人ずつ違うわけだが、この作では、背負い切れない過去を背負っている一人の芸人を描いてみた。

幽霊（関西ではユーレンという）の芸になぜ徹するのか。そして、冬場には幽霊芸が受けない彼は、何処を彷徨しているのかというところを読みとってもらったなら、彼の執念というものがわかってもらえると思う。

昭和八年一月二十六日　大阪生れ
「鬼の詩」にて第七十一回直木賞受賞
主著―「贋芸人抄」

1

あの人と会うたのは、昭和三十五年の秋口やったと思います。

当時、街では――一万三千八百円とかいう流行歌が、心斎橋筋でも道頓堀でも、パチンコ屋はんでも流れてましたなあ。

サラリーマンはんの月給を歌うてはるちゅうことでした。それも、サラリーマンはんの哀感やということでおました。

そやけど、あてら、下座の三味線弾きにとっては、一万三千八百円ちゅうような収入は、ほんま、夢みたいなものでしたなあ。

多い日で、一日に、二個所の劇場を往ったり来たりして、それで、四百円になったら万々歳でおましたなあ。ま、せいぜい二百五、六十円が一日の収入やおまへんでしたかいなあ。

そう、芸人さんの中には、派手に稼いではった人もおますけども、そらもう数は少なかったもんでおます。

現在でも、大阪の芸人はんの中で、えらい稼いだはる人も、いてはりますけども、それも、ほんまに、一抓の芸人はんだけでおます。

漫才屋はんが百八十組、落語屋はんが百三十人もいてはりますけども、稼いではるちゅうのは、ほんの五、六人というのがええとこやおまへんかいなあ。外見が派手に見えまっさかいに、誰も彼もが口ひとつで稼いではるように見えるだけの話でおます。

あの人も、終生売れへん芸人はんでおました。戦後、一番に売れへんかった芸人はんやと思いまっせ。

この間も、元新聞記者やった御方が、昭和落語家全資料というのをお出しになりはりましたけども、あの人の項目は、欄外にポツンと、それも他の若手はんよりも小さい活字で、たった二行あっただけでおます。

――罌粟亭瓜船。（けしてい・うりぶね）

怪談・落語。S・22？――S・55没。

これだけでおます。

昭和二十二年頃から芸人として出発して、昭和五十五年に死んだということでおます。

この芸名も奇妙なもんでおまっしゃろ。

「なんですのや、この芸名は……。明治のはじめ頃に、こんなんがおましたんか」

と訊いたことがおました。

はじめは、うまいこと誤魔化しはったもんでおましたなあ。

「いや、あれへん。わしが勝手につくった芸名なんや。罌粟亭というのは、罌粟の粒みたいに小さな芸人やということやねんがな。瓜船というのは、わしの家が和歌山と大阪

の境で百姓やっててな、瓜畑があって、先祖は、それを船に積んで、町に売りに行ってたというわけやがな」

というてはったんだすけど、これは、照れ隠しの嘘でおまして、罌粟亭というのは――けっして――絶対に――ということでおます。

そやから、芸名の五文字は、

――けっしてうりません。

ということになるのでっしゃろなあ。

なにを決して売りませんのやといわれても、あの人は、あの世に旅立ってしまいはった現在となっては、本当のことはようわかりませんが、心、魂というもんを世の中に売り渡しとうないのやと、あては思いますのや。

あの人と二十年間世帯をもってましたさかいに、そないに思うのでおます。

あてが会うた時、あの人は二十七歳でおました。そやから、あの全資料に書かれている昭和二十二年から芸の道に入ったというのが、あてには、一寸、解せまへんのや。それが事実なら、十三、四の時から、芸の世界に足を踏み入れたことになりまっさかいになあ。

そやけども、あの人は、生前に、戦後の食糧難の時に、丹波、丹後、但馬という土地を大八車の後押しやって、先輩の芸人はんとまわっていたというてはったことがおますさかいに、ひょっとしてひょっとしたら、昭和二十二年頃が出発というのが正しいのかもわからしまへん。

そやけど、はじめに会うた時、とても二十七歳やとは見えまへんでしたなあ。

痩せてはって、色が浅黒くというより煤けてはって、小柄で猫背で、一寸、首を前に突き出すようにして、角座の暗い廊下を、ぺたぺたと草履鳴らして歩いてはったもんでおました。顔も皺苦茶でおまして、反っ歯で、目だけ、ギョロっとしてはりました。

もう、そのままでも怪談咄、幽霊咄がやれそうな雰囲気でおました。どうしても、年齢は、五十を越えてはるように見えたもんでおます。

それやのに、こてこてと顔にセメダイン塗りつけて、皮膚を痙らせはったり、粘土を付けたり、泥絵具を塗りたくったり、前歯一本だけ消しゴムを切って牙みたいに付け歯しはったりしてはったもんでおます。

演し物は、自分で創作りはった怪談でして、時代は不明なもんが大半でおましたなあ。

首を縊って死んだ女郎の幽霊が元の楼主といいますのか、抱え主を恨んで出てくるというのが得意ネタでおましたなあ。

ドロドロの太鼓の音色、寝鳥の笛の音、これも自分で太鼓を叩き、笛を吹いたのをテープに吹き込んで持ち歩いてはりました。

「瓜やんよ、お前な、一応、落語家やったらやな、最後にオチをつけないかんがな。お前のは、それがあらへんやないか。そやからな、講談か落語かわからん中途半端な芸になってしまうんや」

師匠連にそないにいわれはると、くしゃくしゃの顔を、もっと、くしゃくしゃにしはりましてからに、

「幽霊は脚がおまへんさかいに、穴があっても落まへんのや」

といいはったもんでおました。すると、師匠連は、ポンと手を叩きはっていいはったもんだす。

「瓜やん、それやがな。咄の尻にな、今、お前がいうたのをオチに持ってきたらええのやないか。そうやったら、怪談咄になるがな」

「へえ、おおきに。そないにいうたら、そうでおましたなあ……」

その時は、そういいはるものの、決して、オチは口にしはりませんでしたな。

オチ、サゲ、これが東西の落語の結びの部分でおますのに、あの人には、それがなかったのでおます。

一緒になって、なんで、オチがおまへんのやと訊きましたら、

「これが、オチ無い（落ない）落語家やがな」

と、茶化して答えはったもんでした。こういう時には、それなりに、冗談もいえますのに、いざ、高座となったら、もう、幽霊一筋でおました。

「汗をかく幽霊がいてるかい！」

酒に酔うた客に野次られはったこともおます。その時、あの人は、垂れた目蓋の下の目を、かっと瞠きはって、絞り出すような声でいわはったもんでした。

「幽霊でもな、汗もかけば、喉も乾きよるもんじゃ！」

その迫力に、客は酔いが醒めたようでおました。

「幽霊咄というのんは、七月、八月だけでおますやろ。九月に入ったらあきませんのやろ」

あてが、はじめにいうた言葉でおます。その時、あの人の年齢があてよりも三歳下やとは、夢にも思てまへんでしたさかいに、そないにいうたのでおました。

「そうですねん。もう、今日で終りですわ。来年の夏まで出番はおまへんのや……」

といいはったもんだした。

「ほな、その間、どないしてはりますのん。生活の方は……。こんなこと聞いて、失礼やと思いまっけども……」

あてがいうと、肉体労働でも、なんでもしまっせというて、帷子の袖口をまくり上げはったもんだした。どろどろになった麻織の単衣から、つーんと鼻を衝く饐えた臭いが襲ってきまして、あては、思わず顔をそむけたものでおました。

が、帷子から突き出された腕は、筋肉が隆々でおまして、力瘤も大きかったもんだす。

「一寸、この瘤、握ってみなはれ」

いわれたとおりに、指先に力を籠て握ってみましたけども、石のように硬かったのに、愕いたもんです。あての指は、少女の時から三味一途できたんでおまっさかいに、同年の女性の人より力はおます。それやのに、力瘤は、びくともしまへんでした。

「明日からは、何処へ行って働きはりますのん……」

そういうと、あの人の目は、少年の目のようになって、舞台の袖の高い空間に視線を投げかけて、いいはったもんでおました。

「明日から二、三日は、大和へ出かけるのが毎年の日課ですのや。そいから、今度はでんな、冬の幽霊になりますのやがな……」

「冬の幽霊といいますと……」

「それは、わしだけが知ってることですのや。他の誰も知りまへん。知るわけがない」

次第に、澄んだ目に翳りが宿ってくるのがわかったもんだす。

「あても、明日一日は、何処ぞにいって、後九日間は知り合いのやってる小料理屋はんを手伝わせてもろて、それから、京都の席に入ることになってますのやわ。一緒に、明日、奈良へ連れて行ってくれはりませんか。師匠が、大和へ行くといいはった時に、奈良へ行ってみたいなあと思いましてん……」

「師匠！」

あの人は、頓狂な声をあげはったもんでおます。また、キョトンとした少年の目にならはって、あてを瞶めはったもんでおました。口許のあたりに、照れが漂うたもんだす。

「師匠ちゅうようなこといわれたんは、はじめてやがな、こら。なんや、尻が擽ばいなあ」

「奈良に連れて行ってくれはりますか。あて、小学校の遠足で、若草山に行ったきりですねん。奈良の方で仕事がおまへんさかいに……。うんというて下さい」

あては、喋っているうちに、あの人に対して、母性愛が湧いてきたのでおます。それに、こんなこというと羞しいことでっけども、帷子から、ぬッと突き出した逞しい腕を見た途端に、あての体は火照りがやってきたのだす。この三年間、ほんまに男知らずに暮してきましたさかいに、あの力瘤見た時、背筋が、ぞくっとしたもんでおます。

「ほな、一緒に行きますか、あんた……」

少し吃りがちになり、伏目になりはると、あての母性愛はさらに募ってきたもんでおました。

近鉄電車の上本町六丁目の駅で、朝八時に待ち合わせて、奈良に向いました。その当時は、まだ、近鉄は難波まで通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com